

方向

第一三九号 一九九一年一二月九日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

教員・主婦としての すずむし女史 — 春夢女史周辺 一〇— 1991.6.19-7.30 原田憲雄

坪井すむ女史が勤務した学校が山梨英和女学校であるらしいことがわかったので、昨年十二月、その後身である学校法人山梨英和学院に照会したところ、今年一月二十三日付で事務局長山本昌昭氏から次の返事と、短期大学、高等学校・中学校の案内をいただいた。

……過日貴殿から依頼のありました坪井先生の資料について検索しました結果、該当する資料がなく申出に
そうすることができず誠に申し訳ございません。……

年末年始の多用の時期に、一研究者のためにわざわざ調査されたのである。結果としてはほとんど何も知りえなかったものの、懇ろな対応に感謝した。短期大学の案内に「プロフィール」として略年譜を載せる。

明治三二年 山梨英和女学校、太田町に開校（六月） 百石町に校舎、寄宿舎落成し、授業開始する（二〇月）

明治三五年 同窓会誌『多万可都羅』創刊（一〇月）

女史の勤務がこの間であることは推測しうるが、もう少しははっきりさせたい。わたしははじめ、一八九一年の女子学院卒業と同時にであろうと思ったが、これはくずれた。前回の「あはれなる少女」から察すれば、一八九五（明治二十八）年の十二月には「某女学校の寄宿舎」において、女学校が東京のものでないことは、文中の言葉で

明らかである。これが山梨英和であろうか。ところで田中みどりさんの手許には、次の免許状が残っている。

明治三十年七月二十九日ヨリ明治三十五年七月二十八日マデ五カ年間山梨県内ニ於イテ小学校本科準教員タルコトヲ免許

このことから、一八九七（明治三十）年が山梨英和に勤め始めた時のようにもみえるが、免許は一般の学校にも通ずる教員資格で、ミッションスクールの寄宿舎の舎監や寮長にはその資格はかならずしも必要ではない。以下はまったくわたしの憶測にすぎないが、仮説として提出しておく。

女子学院でのすむの学科の受けかたは、「教員資格」を取得するというような点ではおろそかであったのではない。山梨英和で舎監をし、長く教員を続ける気になって、はじめて教員資格を県に申請し、三十年になって許可された。「三十五年マデ」とくぎつてあるのは、そこまで勤続すれば、準教員から正教員に昇格する、という含みであろう。女史が山梨英和に勤めるには、次のようないきさつを想像しうる。

すむの同窓の親友安田磐子が新潟の高田女学校をやめたとき、女子学院から、帰郷のまえに立ちよるようとの連絡があり、学院に行つて、急に帰省しなければならなくなる。そのため京都市行きを中止した。この帰省は、磐子が直接両親に会つて許可を受けなければならぬような任務を、女子学院から託されたことを暗示する。任務は山梨英和の教員の不足を磐子によって充足しようとするのではなからうか。山梨英和はさきに《唐》によつて記したように、一八九一年には校舎を新築し、一八九七年には生徒数百名を越えたという。女子学院とはミッションは違ふようだが、同じくキリスト新教の学校であるから、たがいに援助しあつたであらう。

『阿蘇のけふり』に、滝口みか子は磐子の伝記を書き、「果断の気象ありて人の言語によりて妄りに動かぬ沈着な人だったが「師に事ふること実に従順にして、敢て一度だも師に逆らはれしことなし」といい、

さて君が苦学の功あらはれて、女子学院の学びの業を卒へ、めでたく其故郷に帰る給ふ時は、待つ人々の心も汲まれ、はた父母の膝下にて、いかに楽しく月日を送りたまふことならんと、推し量りまつりに、程もなく其年の九月といふに、教師の職を奉じてこたびは故郷に遠き、北のはて□□□の国高田には赴かれしなり、世のためには身をも思□□□の心しらひこそいとありがたけれ、おのれのこのみちのくに来りしも、君が心にはげまされてのことになん

という。みか子が異郷で教師をしたのも磐子の行動に触発されたことだ、というのである。このたびこそ磐子は故郷に帰り父母に仕えるために教師をやめたのに、師から、九月からさらに山梨へ行ってくれないかと頼まれ、断わることもせず、新しい任務につく準備のため、親友二人との楽しい約束さえ解いて、待つ父母に許しを得べく、急いで帰郷したのであろう。ただの帰郷なら、すむ等との遊びに数日を割くことはできたはずである。ところが、帰郷してまもなく磐子が急死した。そこで女子学院が、就職を希望していたすむに計り、すむも親友の遺志に励まされ、磐子の就くべき職を補おうとしたのではないか。それなら、この年の九月から十二月までのある時期に、すむは山梨英和に勤めていたであらう。そうして、住んだ場所は、その寄宿舎の一室であったらう。起てよ、立てよ、わが心。働きても為しつくせぬ事しげき世に、うかと眠り居るはいと罪深からずや。いで、力の限りつとめはげみて、人の人たるつとめを御国に尽さまし

という女史の「所感」(『菁』)の言葉は、このような状況を背景において発せられたものではなからうか。

徳測を交えた、以上の拙稿を、田中みどりさんに見ていただいたところ、七月十三日付手紙で次の教示をえた。

○(逍遙が春児と知り合ったのが進文学舎などだったか、という点は)私も同感です。春児を医者にと願っていた親は五、六才頃からドイツ語を習わせたとか聞きましたから

○:::小説に出る場処とか年月はその小説をより効果的にする為に作者に都合のよいように変ってゐると思います。「誰が罪」もその例にもれず。ただ「すむ」が逍遙に対する心のうごきの一端でも解る一助にでもと御送り致しましただけで、事実と照らし合せ得る材料にはほど遠いものと存じます

○(逍遙の手紙に「泰治様によろしく」とある件は)当時新宮の家には(すむの兄弟で)この子だけが居たからではないでしょうか

○逍遙の手紙の「両親」のことは仰せの通りだと思ひます

○徐福の墓では「弟」が問題にされてをりますが、私は、あの文の通り一寸思い立って弟をつれていったのだと思われます。勿論あの文は逍遙と親しくなる以前の文で、書きたためである文章帖の中の一文です

逍遙亡きあと少しずつ「女」として成長してきた「すむ」は、かつて共に歩いた徐福の墓を偲ぶその思いがこの文章を発表させたように思はれます。如何にも母らしいと、私には一層いとしい母です

この教示により、すむ女史の文「所感」「蜘蛛の糸」、その他の和歌についてのわたしの推測は、改めなければならぬかもしれぬ。また逍遙の女史宛書翰も、日本近代文学館で整理中という佐佐木信綱宛書翰全体との関

連から見直すことが必要であろう。

『逍遙遺稿』中にわたしたちの見る「恋愛」も、文学作品であり、虚構を含みうる。作者の恋愛の事実とはかならずしも一致すまい。こうした事情は、伝記研究・作品研究を通じて微妙な問題で、厳密に言えば、作品と事実とは別世界、対応・連絡を求めることは無意味であろう。

中野逍遙は、漢詩で、恋愛をうたい、人格の自律をうたった。これはめざましいことだ。しかし、かれの恋愛詩からわれわれが読みうるのは、逍遙の側における哀恋思慕の情のさまざまな変化であって、哀恋思慕の対象たる女性の具体的な姿態・心情、その女性と逍遙との交渉の実際などは、あまりよく見えてこない。そこでかれの詩に現われる恋人またはそれに準ずるひとたちを追って、読者・研究者は、「龍胆」があるいは親戚の「おしづさん」であり、「南枝」が南条サダであり、「春夢女史」が坪井すむであることを突き止めた。突き止めた女性たちのほうから逍遙の恋愛を振り返ってみると、かれとの結婚を同意していたらしい「龍胆」は、たぶんかれのロマンと理想にそぐわずかれのほうから捨てた（もっとも、捨てて平気だったのではなく、そのひとを哀れと思いはしても、他の女性に移った恋心を変えることができなくなったので、「龍胆」関連の詩は、おのれのエゴを自ら弾劾する意味がこめられているのかもしれない）。ロマンと理想にびったりだと思った「南枝」に、かれのほうで結婚の申し込みをしたかどうかさだかでなく、かんじんの南条サダが熱烈な恋愛に夢中になるより實際的・家庭的な女性だったようだ。やはりかれのほうから恋した「春夢女史」すむは、家庭でも学校でも多くのひとたちから十二分に愛され、清教徒的社交に慣れてはいても、熱苦しい恋愛にはなお目覚めていない。

おのれを拒絶する対象にしか思慕する理想を見出しえず、見出したと思つた理想は事実とはすれちがっているという矛盾が、かれが漢詩において描きえた恋愛で、そのチグハグさこそ、日本文学の「近代」がかれののち半世紀をかけて繰り返し描き直し、磨き上げたところのものであった。かれの恋愛詩は悲惨であり、見方によっては滑稽でもあるけれども、その悲惨と滑稽とが切りはなちがたく結びついているところに、日本近代文学の先駆としての位置を占め、意義を担うゆえんが、存するのでもあろうか。

南条サダも、坪井すむも、当時としては最高の教育をうけた女性だった。結婚してからは主婦としての仕事に専念したようで、名をきわ立たせる場所に出てこない。そのことがかえって彼女たちの人格の自律を推察させる。

さて、すむ女史は、田中みどりさんの教えによれば、一八九九（明治三十二）年三月二十八日、宮崎太郎と結婚した。太郎は、宮崎為三・スミの長男として一八七一年一月四日に生れ、女史より二つ年上。少年のころ桜井女学校に学び、一八九一年、札幌農学校を卒業、結婚当時は航路標識管理所勤務であった。この結婚は、すむの叔母で為三の継室、すなわち太郎の義母なる大槻氏のすすめによる。太郎はその後、中学教諭・大学講師など教員生活のかたわら、陸軍通訳官として数回、中国に従軍し、一九二九（昭和四）年、単身赴任の呉市で急死した。傍にいる人に「皆さん、ご苦労様でした。お先へ失礼」といって握手しての臨終だったという。五十九歳。

すむ女史は結婚により山梨英和女学校を退職。夫妻は二男二女を挙げ、二男、丈治と捷は夭折した。女史は夫の勤務や子どもの療養にともない、水戸・東京・平塚に住んだ。

一九二八（昭和三）年、女史、五十六歳。次女の時が角田三寅（つのだみつとき）と結婚した。

一九三四（昭和九）年、女史六十二歳。この年、長女マツ（現在のみどりさん）が田中源蔵と結婚。以後、女史は、東京の大田区千鳥の田中家に同居。

一九四六（昭和二十一）年、女史七十四歳。十一月から床につき、十二月九日死去、法名、戒山妙悟大姉。青岸院に埋葬した。

眠りあさき母に一輪冬すみれ　みどり

着ぶくれしままそのままの仏顔　〃

※あとがき※　中野逍遙の詩を読むゆかりから、「春夢女史」を尋ね、わたしの憶測や推察がどれほど逍遙詩の理解に歩を進めえたかはおぼつかないにしても、近代日本の文明・文化を支える先覚をあまた生み育てた和歌山県新宮の坪井家の存在を知りえたことは、望外の幸이었다。

初めに本稿を促された二宮俊博氏、「春夢」が「坪井すむ」であることなど、数え切れない教示を与えられた若林芳樹大人、坪井家資料を提供し調査に協力された新宮市立図書館、ことにその窓口にあたられた山崎泰氏、逍遙・春夢女史の遺稿を惜しみなく提示された田中みどり氏、遺稿の複写・読解に手を貸された田中利雄氏、その近親の皆さん、その他、拙文をいとわずに読み、教示し、批判し、激励された、すべての方々に、厚く、幾重にも、感謝いたします。（一九九一年七月二五日）

歌人・大塚五朗

(三〇)

1991 11 17

原田憲雄

寺庭

一九四二年(つづき) 五朗、四十五歳。

『水鏡』昭和十七年七月号。

五月の賦

空にゐて鳴く鳥なればそのこゑの土にひびきてまさびしや春

(庭六・続風土三二・花野)

春

ユの色ながら雲雀かくる程は麦のぶ

(〃〃)

山かげとまだ日のささぬ家ありて門(かど)の桜の枝垂(した)れて白き

(庭六・〃〃〃)

朝いまだ日かげ及ばぬ麦の穂の吾子(あこ)の丈より僅かに低し

(〃〃・花野)

『水鏡』八月号。

寺庭

あはれなる日暮となりて寺庭の木賊(とくさ)の緑ややに顕ちくる

(庭七・花野 明海京を去る日)

つつましくあり経しからに寂しくて父がりがへる今日を庭はく 明海律師に

日埃をうすくかむれる庭苔のあはれさいひて今は別るる

(〃〃〃)

おほよそに庭は暮れたるところ騒だちて風を寄らしむる池

(〃〃〃〃・続風土三三)

おとなしく汝を行かしむる今日をみて寺の庭なる木賊に向ふ

事凡てあるがに移る掟ぞといひなだめつつわれおとなしき

夕庭に風来てしばしそよぎしが花の白さの煙(しづ)むどくだみ

(〃〃・水鏡なし)

この一連の歌は、赤谷明海が法金剛院の副住職をやめ唐招提寺の執事となるについて、その送別会の席での詠を中心とする。赤谷明海の『平安学園と私』にいう。

長老から本山で事務をとるように言われ：：私も肚を決めた。そして七年近く暮した花園法金剛院を去ったのが六月二日であった。：：奈良移住の日が迫ってきたとき、私は足利・平野・松浦・斎藤・宮崎篤三郎等を招いて別れの茶会を催した。会の果てようとする頃、突然一艸舎主幹の大塚先生が見え、

あわれなる夕となりて寺庭は木賊のみどりややに顯ちくる

の即吟を牧水調の美声で朗詠して下さった。(二八八頁)

六月二十七日、『艸』第八輯が、謄写版刷りで発行された。原紙の文字は三通りくらいのもので、五朗先生のほか朗さんや喜子さんがこの仕事に当たられたのだろうか。目次は次の通り。

「『道』に就いて(評論)」大塚五朗、「或る手紙(随筆)」岡本和氣子、「政どん(随筆)」大塚喜子、「芥子(随筆)」森田曠平、「だまされた話(小説)」葦光屋長右衛門(足利八郎)、「徳田秋声氏の作品を讀みて(評論)」井手喜一郎、「追想(小説)」平野謙三、「青い風景(随筆)」宮崎篤三郎、「悼しき事件(小説)」ジエイムス・ジョイ

ス作、大塚朗訳、「廃園(短歌)」井手喜一郎、「文学とは何ぞや(評論)」杉田莊作、「真間の井(隨筆)」田中千雅(千美)、「祭り(短歌)」川見すみ子。

「同行名簿」では次の人々が、第三号のときより増えている。

井手喜一郎、若林正太郎、足利八郎、出口栄吉、九鬼正美、斎藤治三、田辺エミ子、兼子悦、原田和雄。

「消息欄」に「六月上旬、東京から杉田莊作君が暇を得て帰洛。六月七日、雨を侵して唐招提寺に明海律師を訪問、半日の歓を得た。五朗・莊作・篤三郎・謙三・朗、それから八木から岡本さんも来てくれて同勢七名」と記している。

七月六日、三女の洋子(ひろこ)が生まれる。

『水鏡』九月号。

女生徒

うつむきて物縫ふみれば愛しさのみな一様に少女(をとめ)さびたる

(庭二〇七 女生徒五首)

ほのかなる少女の汗がにほふとき紫陽花の花は青々として

(〃〃)

をよびもて額の髪をかきあぐるしくさも愛し少女さびつつ

校庭(には) 広く日にきらめける生徒(こ)の髪のがすがしくて六月の風

(〃二〇八)

手を組みて帰りゆく生徒(こ)の後姿(うしろで)に及びて赤し梅雨ぐもる日は

(〃〃)

整わぬ姿態にありてめぐる血の仄かなれども香に頭(た)たんとす

(〃〃)

4-24. 「じつに、すべてこれらの存在は寂靜で、汚れがなく、生滅から離れている。

だからここには、いかなる法も存在せぬ」と考えはするが、信は生じない。(43)
われらは長夜のあいだ、最高の仏の智慧を熱望することはなかった。

このような誓願はわれらに決してなかったが、そこがジナの語られた究竟だとした。(44)
涅槃によって終わる高い地位で、われわれは長夜のあいだ空性を修習した。

三界の苦の悩みから解脱し、わたしたちはジナの教誡を説いた。(45)

われわれは開示した、いまや無上道に旅立とうとするジナの息子たちに、

それらにつき少したが法を説いて。だがわれわれは、熱望することは全くなかった。(46)
世界の導師なる自存の人は、放置して時機を待ち、

真実の問題の意義を説かれなかった、われわれの信解をさぐりながら。(47)

金持の長者の、あの巧みな方便に、それはそっくりだった、

いつも小さな願いしか持たない者を馴らし、馴らしてから、財産を譲った。(48)

非常な難事をなされたのです、救世者は、巧みな方便で開示しながら、

小さな願いしか持たぬ息子たちを馴らし、馴らしてからこの知を与えて。(49)

未曾有のこととおもった、いまこの刹那、貧者が財産を手に入れたように。

仏の教誡により、最上の、卓越した、汚れない果報を得たのだから。(50)
戒を、われらは長夜のあいだ守ってきた、世界を知る方の教誡によって。

われらは、今や、かつて修行したその戒の果報を得たのです、救済の人よ。(51)
至高で、清浄な、梵行に身を捧げてきました、導師の教誡によって、

その卓越した果報を、いまや得たのです、寂靜で、広大で、汚れない。(52)
今や、われらは、「声聞」として、無上道をひとびとに「聞」かせ、

菩提の「声」を開示しよう。そのことにより、われらは威猛相ある声聞なのです。(53)
「アラカン」と、今われらはなつて、救済の人よ、供養を受ける資格ができたのです、

もろもろの天神・悪魔・梵天をふくむ世間から、すなわちあらゆる衆生から。(54)
だれがあなたに報いることができましょう、幾千万カルバのあいだ勉め励んだとしても、

このような非常な難事をなされたのだから、死すべきもののこの世界でなしがたいことを。(55)
手をつかい、足をつかい、頭をさげても、ご恩に報いることは非常な難事です。

頭に、肩に、胸にのせ、ガンジス河の砂の数ほどのカルバの尽きるまで、(56)
堅い食べ物、軟らかい食べ物、衣服、飲物、寝台、椅子、清らかな上覆いを差し上げ、

梅檀の木の精舎を造らせ、そろいの褥(しとね)をしきつめて、贈っても、(57)

病者のための種々さまざまの医薬品を、スガタへの供養として、つねに捧げて、

ガンジス河の砂の数ほどのカルパの間したとしても、お報いすることには決してならぬ。(58)

偉大な法、無比の威力、大神力をもち、忍辱の力に立つ、

仏たちは、偉大な王、汚れないジナであり、愚者のためにこのようなことを忍耐される。(59)

いつもあるがままに随って、事象の表相にとらわれる凡夫に、適切に法を説かれる。

法の自在者、一切世界の自在者、偉大な自在者、世界の指導者の中なる王。(60)

種々さまざまの行き方を示される、衆生の立場を知りつくされて。

またさまざまのかれらの信解をみとおして、幾千の因縁により法を説かれる。(61)

如来はまた、一切衆生の身体の行動を知り尽くされて、

種々さまざまの法を説かれる、この無上道を開示しながら。(62)

以上が、聖なる「妙法蓮華」という法門の信解品第四。

śāntāḥ kila (W:kili) sarv'imi dharmo nāsravā nirodha-utpāda-vivarjitāś ca /
na calra kaś-cid bhavatiṅna dharmo evam tu cintetva na dhoti śraddhā //43//
sunihspṛhā sma (W:sma) vaya dirgha-rātram bauddhasya jñānasya anuttarasya /
praṇidhānam asmāke na jātu tatra iyaṃ parā niṣṭha jineṅa uktā //44//
nirvāṅa-paryanti samucchraye 'smin paribhāvita sūnyata dirgha-rātram /

parimukta traidhātuka-duḥkha-pīditāḥ (W: pīditā) kṛtam ca asmābhi jīnesya śāsanam //45//
 yam hi (W: yamhi) prakāśema jin ātma-jānāṃ ye prasthitā bhottī ihāgra-bodhan /
 teṣāṃ ca yat-kiṃ-ci vadāma dharmam spṛha tatra asmāka na jātu bhottī //46//
 tam cāsma lok ācaryah svayaṃ-bhūr upekṣate kālam avekṣamāṇah /
 na bhāṣate bhūta-padārtha samdhip adhimuktim asmāka (W: asmāku) gaveṣamāṇah //47//
 upāya-kausālyaya yathaiiva tasya mahā-dhanasya (W: dhanasyo) puruṣasya kāle /
 hinādhimuktam satatam dameti damiyāna cāsmai pradadāti viltam //48//
 suduskuram (W: suduskeram) kurvati loka-natho upāya-kausālyaya prakāśayantah /
 hinādhimuktān damayantu putrān damelva ca jñānam idam dadāti //49//
 āścaryā-prāptā sahasā sma adya yathā daridro labhiyāna viltam /
 phalam ca prāptāṃ iha buddha-śāsane prathamam viśiṣṭam ca anāsravam ca //50//
 yac chīlam asmābhi ca dirgha-rātram samrakṣitam loka-viduṣya śāsane /
 asmābhi labdham phalam adya tasya śīlasya pūrvam caritasya nātha //51//
 yad brahma-caryam paramam viśuddham niṣevitam śāsani nāyakasya /
 tasyo viśiṣṭam phalam adya labdham éāntam udāram ca anāsravam ca //52//
 adyo vavam śrāvaka-bhūta nātha samśrāvayisyāmātha cāgra-bodhim /

bodhīya śabdham ca prakṣāyāmas teno vayam śrāvaka bhīma-kalpāḥ //53//
 arhanta-dhūtā vayam adya nathe arthāmahe pūja sadevakātaḥ /
 lokāt samārātu sabrahmakātaḥ sarveṣa satlvāna ca antikātaḥ //54//
 ko nāma śaktaḥ pratikartu tubhyam udyukta-rūpo bahu-kalpa-koṭyah /
 suduṣkarāṅ idrśakā karoṣi suduṣkarān 'yān 'iha martya-loke //55//
 hastehi pādehi śireṣa cāpi pratipryaṃ duṣkarakaṃ hi kartum/
 śireṇa amsena payodhareṇa (W:ca yo dhareta) paripūrṇa-kalpān yatha gaṅga-valīkāḥ //56//
 khādyaṃ daded bhojana-vastre-panaṃ śayan'āsanam ca (W:co) vimalottara-cchadam /
 vihāra kārapayi candanā-mayān samstīrya co dūṣya-yugehi dadyāt //57//
 gilāna-bhaisajya bahu-prakāraṃ pūjā 'rtha dadyāt sugatasya nityaṃ /
 dadeya kalpān yatha gaṅga-valīkā naiyaṃ kadā-cit pratikartu śakyam //58//
 mah 'etima-dharmo (W:dharmā) atulānubhāvo (W:atulānubhāvā) maha-rddhikāḥ kṣānti-bale pratishhitaḥ/
 buddho mahārāja anāsravo saṅanti bālā na im 'idrśāni //59//
 (W:buddhā mahā-rāja anāsravā jinā saṅanti bālāna im 'idrśāni).
 anuvartamānaṣ taṭha nitya-kālaṃ nimitta-cāriṇa bravīti dharmam /
 dharmeśvaro īśvaru sarva-loke mahēśvalo loka-vinśyakendrah //60//

pratipatti darśeli bhau-prakāram (W: prakāram) sattvāna śhānāni prajānamānah /

nānā dhimuktiṃ ca viditva teṣāṃ hetu-sahasrehi bravīti dharmam // 61 //

lathāgalas carya prajānamānah sarveṣa sattvāna tva puṅgalānām /

bahu-prakāram hi bravīti dharmam nidarśayanlo imam agra-bodhim // 62 //

ity ārya-saddharmapūnderike dharmā-parvāya adhimukti-parivarlo nama calurllah //

ここは4-18.19.の長行に相当するところで、内容は長行とそれほど変わっていないのだろうと思うが、これらの偈のなかには、わかりにくい句が少なくない。先進の訳文もさまざまに分岐しているところから察して、わたしの無知によるばかりでなく、原梵文がわかりにくいのであろう。妙本が、さすがにいちばんよく通るが、しかし、梵文にある言葉がなかったり、ない言葉がつけ加わったりで、これまでたびたびふれたように、テキストの異同が問題となる箇所であろう。例えば(43)を、

所以者何 一切諸法 皆悉空寂 無生無滅 無大無小 無漏無為 如是思惟 不生喜樂

ゆえはいかん。一切の諸法は、みなことごとく空寂にして、生なく滅なく、大なく小なく、無漏無為なればなり。かくのごとく思惟すれども、喜樂を生ぜざりき。

と訳していて、「だからここには、いかなる法も存在せぬ」は「無為」の二字に縮約してあると考え得るにしても、「無大無小」が梵文の何にあたるのかは不明で、韻文としての言葉数をあわすために付加したものらしい。

とにかくこれで「信解品」はおわり、次回から「菓草喩品」第五。道はなお遙かである。

「あんた鳩笛を東京の人に送ったと言うてたさかい、このあいだ八幡さんへ行った時に、あんたのぶんをこう
といてあげたえ、なんかあの鳩、大きな目をして、あんまり可愛らしいことあらへんなあ、前からあんなんやっ
たか」

と友だちが言った。

「そうや、大きい目をしてちょっと変わった感じがするさかい、わたしはそれが面白いので見てもらいたいと思っ
て、東京へ送ったんやわ」

亀岡市の篠村八幡宮の鳩笛は、それほど目が大きい。黒い丸い目のまわりを赤で描いてあって、小さな頭にし
てはいかにも大きすぎる。赤い口がちよこつとついでいて、その上に鼻こぶが二つふくらんでいる。アザランの
ようなとぼけた顔が、何かもの言いたげな様子に見える。まっ白で八センチほどの小さな鳩笛である。

東京の詩人比留間一成氏は、この笛を受け取って、「鳩笛」という童話風の詩を^書書いて下さった。

それは主人公である「私」が鳩笛とパンと乾飯を持って公園に出かけるところから始まる。鳩笛を「ぼっぼー」
とふくと、鳩がやって来て、黙って餌を食べる。また「ぼっぼー」とふくと、鳩が突然に飛び立って、鳥がやって
くる。うまいことを言つて大きなパンをせしめた鳥が飛び去ると、尾長がやって来て、「おじさんばかね、だま
されて……」とさんざん悪口を言いながらパンを食べて飛んで行ってしまふ。私はしおれて、子どもの頃のこと
など思い出しながら、「ぼっぼー、ぼっぼー」と鳩笛をふき鳴らしていると、小雀たちがやってくる。小雀はみ
んな元気がなく、希望を失い疲れている。もう帰りたいと言つて私にくっついて離れようとしなない。困つて

しまつて仕方なく、

ぼっぼう ぼっぼう と又ふいてみました。

その音は、どこにも反響しないで私の耳をうち、からだの奥底に沈んでいきました。この秋も曇り空からはじまるのでした。

という結びになっている。比留間氏の詩を読んでいると、いつも幼いもの、弱い立場のものへのいたわりと共感が深いところにあつて、そこから吹き上げてくるやさしい風のような温かさを感じる。

鳩笛は素焼で、直接、口をつけて吹くと、笛と唇がくっついて離れなくなる。笛に指を添えてその間から吹くと、ポーと鳴る。鳩はこんな声で鳴くのだったかなあと思う。

ところで、わたしが篠村八幡宮へ参拝したのは五月三日、風はまだ少し冷たかったがよく晴れた静かな日だった。「鳩笛をこうといてあげたえ」と言ってくれた人に案内してもらって行った。ちょうどその頃は、NHKの大河ドラマ「太平記」の撮影が行なわれた後だということで、その次の週くらいにこの場面が放映されるらしい。元弘三年(一一三三)四月二十九日、足利高氏が、北条氏を倒して源氏を再興するために兵を挙げたのがこの村の神社だったのである。

篠村八幡宮はJR山陰線の篠駅から坂を上がって少し高い所にあつたが、駅の近くには道路にそつて旗が立ち、八幡さんのことを宣伝しているらしかった。わたし達が行った日には八幡さんには人影が少く、境内の整備が少しずつ進んでいる様子で、木を切っている人の姿があつた。神社の入口には新しく「篠村八幡宮」と「浩宮徳仁親王殿下御成記念」という石碑二基が並んでいた。本殿と拝殿はあまり大きくはないが、その右前方に大きな相模の土俵があつたのがめずらしかった。かなり広い境内で、山が近く、田畑も多くて山村の趣は残っているが、

神社の囲りには家も多くなっている。この辺りの現在の地名は、亀岡市篠町篠八幡裏という。

「篠の八幡さんになんで鳩笛があるのやろ、狛犬さんの台にも、どちらも、二羽の鳩がくちばしを合わせるように仲よく向い合って浮き彫りにされてたけど」とわたしと言うと、友人は、

「さあ、よくわからんけど、鳩は八幡さんのお使いやていうわね」と言った。

そうだった、それなら篠村八幡宮に鳩の彫刻や鳩笛があっても何の不思議はない。郷土玩具についての本を見ると、八幡宮の神玩としての鳩笛や鳩車が全国に多い。では何故、鳩が八幡さんのお使いなのだろうか。神の使いとしてよく知られているものに、春日の鹿、熊野の鳥、日吉の猿、稲荷の狐などがあり、山犬や百足、鯨を使いとする神社もあるという。『民俗学辞典』によると、「：：われわれの尊ぶ神はその姿を直接現わさないから、仲に立つ小さな諸霊を通じてでないと神意をうかがうことのできないもののように考えられていた。：：」とし、われわれの祖先は、より自然に近く、動物と密接な生活をしていたので、その挙動によって神と結びつけ、予告・警告を受け取ったのだと説明されている。わたしも子どもの頃に、ネズミが音をたてないと火事が出るとか、地震が起きるなどと聞いたが、動物が自然の異状を感じ取る力の優れていることは、かれらが生きるための必要条件でもある。

例えば狐の場合には、狐が山から下りて、稲田に食物をさがしに来るのが、秋から冬になる頃なので、この姿を見たり、夜に山の方からその声が、するどく「ケーン」と響き、時には家の近くをひたひたと足音をさせて走るのを聞けば、何か背筋のびんと張るような恐ろしさを感じる。わたしが子どもの頃には、こんな夜、必ず、飼っていた兎が殺されたから、神の使いだと思わなかったが、昔の人は、これを山から里に下られる神霊の^前象徴であり、使令であると想像したのだという。それだけ人が、自然と一体であり、自然の一部であったのだということ

が分かる。人が虫や草や土と同じ自然のものであるということはよくわかってはいるつもりだけれど、今、わたしは、そういう感じ方を「すごいなあ」と思ってしまう。「わたしは土だ」ということを理解することはできるけれど、わたしはよりよい土になろうとはせず、その土から離れることばかりに心を砕いてきたような気がする。ところで、鳩と八幡さんであるが、どのような靈験譚があるものかと、八幡信仰について調べてみた。ずいぶん研究が進み、多くの本が出版されている。『八幡神社の研究』（志村有弘等編、叢文社）『日本の神々・神社と聖地1、九州』（谷川健一編、白水社）の二冊を借りてきて読んでみると、八幡さんの歴史は日本の歴史とも言えるものだった。

日本の神社信仰の中で最も大きく発展したのが八幡信仰で、全国津々浦々に鎮座し、神社の数は、末社、摂社を除いても、四三、〇〇〇社もあるという。稲荷が三二、〇〇〇社で次に多い。八幡神社は沖縄県の一社、鳥取県の一二社は極端に少ないが、岐阜県四五六社、広島県四五四社、愛知県四二四社などが多く、北海道四八社、東京都一四二社、奈良県一三五社、京都府一五二社などは数としては多いほうではない。わたしの生まれた村は、字（あざ）と呼ぶ小さな集落が八つあって、それぞれに神社を祀っているが、なかの二社が八幡神社である。八幡信仰の性格は、天皇（国家）の守護神・農耕神・仏教守護神・航海神・戦勝神などと多いことからみても、全国ない地域がないほど、八幡神社が祀られるのも、もっともなことである。

八幡神社は大分県宇佐市の宇佐神宮に創祀された。全国に分布するには三つの順序があるという。

一 奈良、平安初期までは、宇佐八幡から分霊が勧請された。東大寺の大仏殿建立のとき、宇佐八幡は託宣を下し、「天神地祇を率い誘いて大仏の造立を必ず成就せしめるであらう」という援助の決意を表明した。天神とは、伊勢、山代嶋、住吉、出雲国造斎神（いずものくにのみやつこのいつきまつるかみ）の類であり、地祇とは、

大神（おおみわ）、大倭（おおやまと）、葛城鴨、出雲大汝神（いずもおこなむちのかみ）の類であった。つまり日本の神々の総体である。天神地祇が大仏造立を援助するということは、それを奉祀する人々が大仏造立援助に組織化されることと同義であった。宇佐八幡は、渡来系の「韓国」の人々の祀る神であったと考えられ、高度の鑄造技術を持ち、豊前国田川郡香春（かわら）を支配し、豊富な銅を産出したので、その力を、大仏造立に投入しようという意味を持っていたのだという。天平勝宝元年（西元七五〇）七月に大仏が完成すると、宇佐八幡は、大仏を礼拝したいとの託宣を下し、十二月に宇佐からはるばる上京した。孝謙天皇、聖武上皇、光明皇太后も参会して大法要が営まれた。大仏完成の直後、大仏の鎮守として八幡の分霊が勧請されたのが手向山八幡で、全国の国分寺にも分霊が勧請され鎮守となった。

二 貞観元年（八五九）に、宇佐八幡は託宣を下し、王城鎮護のため、山城の男山に鎮座することになった。石清水八幡である。石清水八幡は、これまで託宣に関わってきた宇佐八幡の神職団から切り放されるとともに国家鎮護の神となった。清和天皇即位に関連して、藤原良房の画策のもとに行なわれた国家的事業であったというが、この頃から有力神社の祭神のなかに八幡を合祀するものや、神社名を八幡宮、八幡社と変わったものが多い。

三 清和源氏の守護神であるとともに、武門の神として源氏一門に尊崇された。源頼義が、八幡宮に参詣した時に靈剣を賜った夢を見、その後で生まれたのが義家であったという。義家は七歳の時、石清水八幡宮で元服して、八幡太郎義家と呼ばれた。四代後の頼朝が鎌倉の鶴岡八幡宮に分霊を勧請すると、全国の御家人が自国の荘園に八幡社・若宮八幡社などとして勧請した。

このようにして、八幡神社は全国に祀られるようになったわけである。

「藤村八幡宮の概要」という神社の説明書によると、本殿の主祭神は菅田別命（ほむだわけのみこと・応神天

皇)で、その父・仲哀天皇、母・神功皇后が合わせ祀られている。この地は源頼義が、自分の荘園であった篠村の庄を寄進したもので、寄進状が現存するという。その一族である足利高氏が、源氏縁りの篠村八幡宮で戦勝祈願をして北条氏を滅ぼすための旗挙げをしたということは、高氏にとって、意味の深いことだったわけである。

八幡大菩薩とは、神が仏法を悦び、また仏法によってのみ救済されるとする神仏習合の教説を具体化した最初の神が宇佐八幡であったために、奉られた菩薩号であるというが、この神を応神天皇とする考え方は、奈良末期、中央政府側の立場にある人によって出されたものらしい。東大寺の大仏が造立されて、宇佐八幡が参詣した時の、橘諸兄の神に申す一文に「豊前国宇佐郡に坐す八幡の八幡大神」とあるという。また「宇佐託宣集」の中の、宇佐八幡の出現に関する記録には次のような話がある。

筑紫豊前国宇佐郡の菱形池の辺り、小倉山の麓に鍛冶の翁がいた。この辺りに近づく者は、ほとんどが死ぬの上にいる。そこで鷹に、だれかの力によって鷹の姿に変えられたのか、それとも自身の意志によって鷹の姿になったのかとたずねると、鷹はたちまち金色の鳩になり飛んできて、比叢の袂にとまった。神が人を利益しようとしてみずから変身したことをさとした比叢は、それから三年間、山中で修行して、「神であるならば、何とぞわが前にお姿を顕わしたまえ」と祈った。すると三歳の「小児」が竹の葉の上に現れ、「辛国(からくに)の城(き)に始めて八流の旗を天降して、吾は日本の神となれり」と宣した。宇佐八幡は、菱形池の辺り、小倉山の麓にいた鍛冶の翁、金属を鍛えて種々の器物を造る人であり、つまり金工であった。「辛国」は「韓国」で、韓国の神であった宇佐八幡は辛国人の村の清浄な場所に現われ、こうして日本の神になったのであろうと、古い信仰について説明されるのである。

現在の宇佐八幡宮には三つの本殿が並び、第一殿が応神天皇、第二殿に比売大神、第三殿に神功皇后が祀られているというのである。

わたしのさがしている鳩という文字がここに「金の鳩」として出ているが、この八幡神は古い信仰の神であるから、鳩が八幡神の使いであるということと結びつくかどうかわからない。応神天皇や神功皇后と鳩との関係はどこにも書いてない。

源頼義が、前九年役の時に、八幡神に「風を出し火を吹いて敵の柵を焼いて下さるよう」と祈ったら、それに応じるかのように八幡の使者である鳩が現われて、軍陣の上を飛び廻ったということが書かれていますので、鳩が八幡神の使いとされるのはまちがいない。

他に「八幡愚童訓」というのが、『群書類従』のなかにあつて、石清水八幡宮の関係者によって書かれたものだろうとされ、一、三〇〇年頃に成立したものかと推定されているが、このなかの説話の一つに、

：：カレニ紫鳥ト云鳥アリ。日ニ三節廻テ鳴声ハ説法音楽ノ如シ。其鳥ニ我ハ化セルヲ凡夫ノ眼ニハ鳩トミル也ト告給ヘハ。鳩ハ是吾神御変身也。：：

と書いたところがある。この鳩が親の仇討ちをしたというような話らしい。とにかく鳩という文字が見えるのはこの辺りだけである。紫鳥を鳩と見るといふのなら、白鳩ではなくて、たくさんいるキジ鳩なのだろうか。

「八幡の神」の「やはた」は地名の矢幡、矢羽田大神寺の矢羽田、仏法の幡などの学説があるというが、「はた」と「はと」の音から来ているのではないか、など考えてみるものの、これという決め手はみつからなかった。五月にわたし達が、篠村八幡宮に参拝した時に、生きた鳩は見られなかったように思う。わたしは鳩の音が聞いてみたくなって、先日、天神さんへ行つた。七五三のお参りの子どもが、着飾って参道を歩いてた。鳩の群

の中に立って、棒についたチョコレットを差し出してゐる子どもがあったが、パン屑をたくさん持ってきている人があったので、鳩はそちらに気をとられていた。たくさんの鳩が、折り重なるようにパンを拾っていたが、一羽だけまっ白の鳩がいて、その鳩は決して中に入ろうとしなかった。大きな石燈籠の上をくるくる廻り歩いて下へ降りないのだった。時々、ふと灰色の鳩がそばへ飛んでくると、その後を追って燈籠の上を歩くが、灰色のが飛び去ると白い鳩はまたひとり石燈籠の上を歩いている。群が何かに驚いて、一斉にぱっと飛び立っても白い鳩は行かなかった。この様子を見ながら、わたしは知らないうちに、何かの意味づけをしようとしてしまっている。昔の人が、突然に現われる空飛ぶ鳥の姿に驚き、遠く呼びかけるような、鳩のオーオーと響く声を聞けば、神の姿、予告と感じたのは無理もないことだと思ふ。

わたしも鳩笛を吹いてみようと思つて、人のいない伴氏の供養塔の方へ行つて、ポーと吹いた。たまたまその時、傍の柿の木にいた鳥が「ガー」と鳴いてばたばたと飛び立った。後を追つてまた一羽が飛び、揃つて近くの松の木にとまった。あとに残つた一羽が、ちらつとそちらを見てから、素知らぬ振りで柿の実をつついてゐる。「あっおまえ達、そういう気だったのか。いいよ、その代りこの柿の実はみんなおれさまがいたただくからな」負け惜しみの強そうな鳥だが、ひとりぼっちの鳥に、わたしはおかしさと同情を感じた。

※本号

八頁の六行と七行の短歌の一部の印刷が不鮮明になりましたので、左に再掲いたします。

春いまだ目にしむ土の色ながら雲雀かくる程は麦のぶ

風ぐせの今日もさびしき午後にして菜種の花の黄(きい)が目にしむ